

声を放つ当事者の証言 日刊ゲンダイ

東京柴又・上智大生放火殺人事件「眠るように穏やかな表情…唯一、それだけは安心できた」 公開日：2022/09/19 06:00 更新日：2022/09/19 18:05

小林順子さんの父・賢二さん



小林順子さん（提供写真）拡大する

1996年9月9日、上智大4年の小林順子さん（当時21）が東京都葛飾区柴又の自宅2階で殺害された事件から26年を迎えた。

◇ ◇ ◇

順子さんの父・賢二さんが第一報を聞いたのは、東北新幹線・新白河駅（福島県）の上りホームだった。前日から栃木県那須で会議があり、帰宅する列車を待つホームで部下と一緒にいた。

「会社から携帯電話に着信がありました。『お宅が火事のようなようです』と言われ、事件という概念は全くなく妻がパートに出掛ける際に慌てていて、火の不始末でもしたかとか想像できませんでした。とにかく情報が欲しいと電話をかけまくりました」

大学生で次女の順子さんは夏休み中。2日後に米国留学への出発を控え、自宅にいるはずだった。「無事であってほしい」と祈りながら、「一刻も早く東京に戻りたい」と新幹線に飛び乗った。

「やっとながった電話は妻の友人宅で、ご主人から『お嬢さんがケガをされたらしく、病院に運ばれたようです』と教えていただきました。この時は『あさっての留学に差し支えないといいが』と考えるだけで、事件とは想像にも及びません。運ばれた病院に電話すると女性が出て、『小林です』と名乗るとすぐに男性に代わった。一瞬嫌な予感がしました。『お嬢さん、病院に到着した時にはすでに亡くなられていました』と告げられ、ここで初めて娘の「死」を知らされました。頭の中は真っ白、目の前が真っ暗に。あれだけ楽しみにしていた交換留学の出発が明後日だったのではないかと……」

東京は雨が降っていた。肌寒い日で気温は20度もいかなかった。「一刻も早く」と手前の駅で電車を降り、タクシーで自宅に向かった。現場にはパトカー、消防車、救急車が並び、

大勢の野次馬をかき分けて自宅前で名乗り出ると、ある屈強な男性に車に引きずり込まれた。捜査1課の刑事だった。

「お父さん、よく聞いてください。娘さんはただの事故死ではないのです。何者かに殺されたのです。」

ここで初めて事件であることを知らされた。

その瞬間から「なぜ我が家が?」「なぜわが娘が?」「なぜ.....なぜ.....なぜ.....」。この疑問符は未解決である現在に至るまで消えたことがないという。

「亀有警察署に着いて、妻と長女と合流しました。何も知らされていない妻は『早く会わせてくれ。なぜ病院に連れて行ってくれないんだ』の一点張りでした。妻だけが娘の死を知らされていなかったのです。いや誰ひとりとしてその事実を伝えられなかったのです。後に娘と対面したのは、私と伯母、長女で、妻はどうしても見られませんでした。娘は眠るように穏やかな表情をしていて、唯一、それだけが救いでした。

■「まさか未解決になるとは考えてもいませんでした」

時計の針が10時を指した頃、その日の事情聴取が終わった。「今日はここまでにしましょう。お疲れさまでした。」刑事の声にフッと緊張の糸が切れたその瞬間、大変なことに気がついた。自宅は焼けてしまっていて帰る場所がない。付近に気の利いたホテルがあるような地域ではない。「家族が路頭に迷う」とはこのことだと実感しながら、途方にくれていた。すると、温かい手を差し伸べてくれる人がいた。

「妻は、長女が小学生の頃からママさんバレーを続けていて、そのチームメイトの1人が、『良かったらうちに来ない?』と声をかけてくれました。家族4人が生活する4LDKのマンションで、決してスペースに余裕があったわけではなかったでしょうが、とにかく『今夜一晩だけ雨露凌げれば』と明日以降のことまで考える余裕すらなかった。結局そのお宅には1週間お世話になりました。私たち遺族が3人だけで過ごすのもためられましたから、本当にありがたかった」

翌日からは現場検証と[保険](#)や罹災証明、葬儀などの手続きに追われる地獄の1週間が瞬く間に過ぎた。「並行して新たな住まいを模索していると別のチームメイトの方が物件を探してくれていて、現場から400メートル離れた2DKに移り住みました。私や長女が警察に呼ばれて出掛けている間は、妻を1人にしないよう、付き添ってもらっていました。それはそれは助かりました。私が比較的早く職場に復帰できたのも彼女たちのおかげです」。

小林さんがもっともつらかったのは新居に移って最初の晩だったという。

「それまでは誰かしら取り巻きがいて何とか気が紛れました。ところがいざ 3 人きりになると寂寥感にさいなまれました。当時の感覚はうまく言葉では言い表せません」

犯人はすぐに捕まるだろうと思っていた。「まさか未解決になるとは考えてもいなかった」と言う。

現場からは A 型とみられる血液と DNA が検出されている。その後、事件から 12 年経って時効制度の撤廃に向けて活動を始めることになる。

時計の秒針の音がまるでカウントダウンに聞こえてくるほど、追い詰められていました



[全焼した家屋の敷地の一角に設置されている「順子地蔵」\(提供写真\) 拡大する](#)

現場からは A 型とみられる血液と DNA が検出されており、犯人はすぐに逮捕されると考えられていた。

当初の予想とは裏腹に、発生から 10 年が経過しても犯人は捕まらなかった。

「被害者遺族と刑事の関係は、時間とともに希薄になります。事件直後は現場検証などでほとんど毎日かわりがありました。この 10 年以上は年に数えるほどしか会っていません。事件の解決につながる“お土産話”がなければ、警察の方も足が遠のくのでしょうか。最初は 1 日置きだったのが、しばらくすると週に 2~3 回になり、そのうち月に 1 回ぐらいと、どんどん減っていきました。情報が先細りになってしまい、捜査が膠着状態に陥っていることは容易に想像できました」

気がつけば殺人罪の時効となる発生から 15 年 (=当時、05 年以降は 25 年で、現在は撤廃) が近づいていた。「時効」の 2 文字が現実味を帯びていった。

「凶悪犯罪のすべてが解決しているわけではありません。このままでは自分も無念の涙を流すかもしれない、という危機感を感じていました。正直、“15 年の壁”を壊せる自信はありませんでしたが、このままでは娘に申し訳ない、言い訳はできない、と気持ちを奮い立たせました。時計の秒針の音がまるでカウントダウンに聞こえてくるほど、追い詰められていましたが、とにかく時効制度を停止、延長、できれば廃止に追い込みたいと考えていました。でも、1 人でできるものだろうか、と不安もありました」

殺人事件被害者遺族の会を発足し公訴時効の撤廃を実現



米留学先で使用するはずだった荷物（提供写真）拡大する

時効まで残り 3 年となった 2008 年の 7 月、個人的に付き合いのあった新聞記者にその思いを吐露したところ、世田谷事件（00 年 12 月発生）の捜査を警察署長として指揮した土田猛さんを紹介された。そして 09 年 2 月末、公訴時効制度の撤廃や停止を国や世論に訴えていくことを目的にした「宙の会」（殺人事件被害者遺族の会）を発足。DNA 型といった犯人を特定する証拠が残っている事件の時効は停止するなど、捜査技術も含めた見直しを国に求めた。

直前の 1 月に [自民党](#) の森英介法務大臣（当時）が「公訴時効見直し」に向けた勉強会を設けたタイミングでもあり、6 月までに約 4 万 5000 人の署名を集めて法務省に提出した。

年末には法制審議会にかかるかという段階まで達していた。しかしこの年の 8 月の総選挙で民主党に政権交代し一気に流れがよどんだものの、各メディアの報道や世論の盛り上がりもあり「宙の会」結成から約 1 年半、2010 年 4 月の刑事訴訟法改正で、殺人などの時効が撤廃された。

今年 9 月、事件から 26 年を迎えた。放火で全焼した家屋があった場所には現在、消防団の建物が建っている。当初は犯人が逮捕されるまで、そのままの状態でおくつもりだったが、時効撤廃直後の 10 年 10 月、置き場に困っていたポンプ車など消防用具の格納庫となった。

ただ、敷地の一角には「事件を風化させない」という小林さんたちの決意を込めた「順子地蔵」が設置され、花壇も整備された。

「おかげで事件現場にほとんど足を運ぶことがなかった妻も、四季折々の草花の手入れに、足が向くようになりました。私たちにとって事件が風化することが一番怖いんです」埋没している情報を掘り起こすために捜査特別報奨金（上限額 300 万円）のほか、小林順子さん殺人事件の捜査に協力する会による謝礼金（上限額 500 万円）も用意している。「命日に献花・追悼式を行ったり、ビラを配ったり、これまで 80 ほどの中学校で、いのちの大

切さを学ぶ教室として子どもたちに事件を語ってきました。犯人はどこかで見ているんだと思う。発信を続けることで、諦めてはいないと犯人に伝え続けたい」

順子さんは、事件の2日後に米国留学の出発を控えていた。その遺志は、順子さんが渡航の荷物に入れていた英和辞典とともに、今年1月にサンディエゴへ留学した小林さんの孫娘に受け継がれている。

※事件直前、現場付近では黄土色のコートを着た不審な男の姿が目撃されている。ささいな情報でも気になることがあれば「警視庁亀有警察署 柴又三丁目女子大生殺人放火事件特別捜査本部」(Tel.03.3607.0110)まで。